



Title	1918年総選挙一人区における労働党の戦績
Author(s)	岡田, 新
Citation	大阪大学英米研究. 2020, 44, p. 11-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99442
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1918 年総選挙一人区における労働党の戦績

岡田 新

1

1918 年総選挙は、第一次大戦の停戦からわずか一か月余りで行われた。戦場の血糊も乾かぬうちに闘われたこの総選挙は、ロイド・ジョージ (Lloyd George) 率いる連立政権与党の圧勝に終わる。もちろん戦勝をもたらした宰相の勝利は、珍しい現象ではない。1900 年総選挙でも、ボーア戦争での勝利に沸き立った国民は、ソールズベリー (Lord Salisbury) の与党統一党 (Unionists) に地滑り的な大勝をもたらした¹。皮肉にも、若きロイド・ジョージはこの選挙で、プロ・ボーア (pro-Boer) 派の旗頭となり、反戦平和の闘士として名を馳せたのであった。

しかし 1918 年総選挙は、一過性の祝典には終わらなかった。戦勝の祝祭の背後で、巨大な政治的地殻変動が起きていたからである。大英帝国最盛期の政治を担い、20 世紀初頭に大胆な社会改革、政治改革を主導した自由党は、連立与党のロイド・ジョージ派と非連立野党のアスキス (H. H. Asquith) 派に分裂、非連立派の自由党は、アスキス元首相自身が落選、惨憺たる敗北を喫した²。一方、エドワード時代に自由党の目下の同盟者の地位に甘んじていた労働党は、全国の選挙区に候補者を立てた。獲得した議席は、躍進と呼ぶには控えめだったものの、労働党はかつてない得票を集め、野党第一党の地位に躍り出た。労働党と自由党は、この後 1920 年代を通じて議席を競い続ける。だが 1918 年総選挙以後、自由党は政権につくことはおろか、ついに野党第一党の地位を奪い返すこともできなかった。巨視的に見れば、1918 年総選挙は、自由党と保守党 (ないし統一党) が対峙す

る 19 世紀の二大政党制に幕を下ろしたイギリス政治史の巨大な分水嶺であった、と言わなければならない。

だが 1918 年総選挙は、単に議席の上で自由党の凋落、労働党の前進の起点だったばかりではない。選挙政治の構図においても、時代を画する選挙であった。繰り返し指摘してきたように、自由党と労働党の支持者の強固な結束（いわゆる「革新主義同盟」progressive alliance）が、エドワード時代の選挙政治の最大の特徴の一つであった³。しかしそれは、1918 年総選挙で、自由党の分裂と全国的な労働党候補の擁立によって瓦解した。その結果、それまで自由党と労働党の支持者の強固な結束の舞台であった二人区では、自由党の支持者との同盟関係を継承することに成功した時、労働党候補は議席に手を伸ばす機会を得ることに成功した。自由党に労働党が取って代わるプロセスが産声を上げたのである⁴。

では二人区においてみられたこうした現象は、果たして一人区でも起きていたのだろうか。1918 年選挙での労働党の前進は、その後の労働党の党勢の伸長の足がかりとなったのであろうか。それとも、自由党によって奪い返される一時的な現象だったのか。本稿では、こうした観点から、連立派候補および自由党候補との争いで労働党が議席を獲得した選挙区に焦点を絞って、1918 年総選挙における一人区の戦況を分析したいと思う⁵。

2

既に別稿で概観したように⁶、1918 年総選挙の一人区で、連立派と非連立派の候補が一騎打ちに臨んだ場合、連立派の候補と争う上で、労働党の候補は、非連立派の自由党候補と遜色のない票を集めた。そして連立派と非連立派の三つ巴の闘い、つまり連立派の候補一人と非連立派の自由党候補と労働党候補が争う場合にも、労働党の候補は、自由党の候補より平均して高い得票を獲得し、連立派の候補を相手に、労働党の候補は、自由党候補と互角に、場合によっては自由党の候補を凌ぐ集票力を発揮した。

しかし別稿の分析は、連立派と非連立派との対抗関係を概括して整理したものに過ぎなかった。本稿では、より細かい政党の対抗関係の分類に基づいて、もう一步分析を深め、さらに 1918 年総選挙の結果が、1920 年代、1930 年代の労働党のパフォーマンスに与えた影響を観察したい。

まず一人区で候補者 2 名が一騎打ちしたケースについて、立ち入った分類を加えたものが表 1 および表 2 である。表 1 から分かるように、該当する選挙区が少ない連立派労働党ないし連立派無所属候補と自由党・労働党の争いを別とすれば、連立派保守党の候補、連立派自由党の候補との争いで、労働党の候補は、自由党の候補と遜色なく闘っていた。とりわけ連立派自由党の候補に対しては、自由党は、一例を除いて対抗馬を擁立しなかった。その結果、連立派自由党との一騎打ちの相手方は、ほとんどすべてが労働党候補となった。そして労働党は、首相ロイド・ジョージの直属部隊である非連立派自由党とのこの闘いで、5 議席を獲得した。逆に言えば、自由党候補は、連立派保守党候補に対しては、労働党候補と同じように闘う力を発揮したが、ロイド・ジョージの直接の傘下にあるかつての同僚に挑戦することはなく、労働党候補が、もっぱら連立与党に立ち向かい、一割ではあるが議席を奪った。これは労働党が、連立派の候補に対抗する主な野党勢力として立ち現れたことを鮮やかに物語っている。

更に注目すべきことは、労働党の候補が、ほとんど初めての挑戦であったにもかかわらず、連立派の自由党候補に対して、非連立派の自由党の候補の闘いぶりとは、わずか数%しか得票率で変わらない結果を出していたことである。少なくともこうした選挙区においては、自由党にかわって労働党が連立派に立ち向かった時にも、反連立政権の票を、自由党候補と同じように結集できる力をもっていたことが分かる。

1918 年総選挙一人区のこうした結果を、労働党が勝利した選挙区について、1920 年代、1930 年代の選挙結果を参照してより長いコンテキストから位置付けてみよう。

連立派保守党の候補と一騎打ちで対峙し、労働党が勝利を収めた 5 つの選

表 1 1918 年総選挙一人区における連立派保守党ないし連立派自由党と自由党ないし労働党の一騎打ちにおける獲得議席

	自由党	労働党
連立派保守党	4 (61)	5 (64)
連立派自由党	0 (1)	5 (55)
連立派労働党	0 (1)	0 (1)
連立派無所属	0 (2)	0 (2)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は非連立派自由党および労働党の獲得議席を示す。() の中の数字は、選挙区数を示す。

表 2 1918 年総選挙一人区における連立派保守党ないし連立派自由党と自由党あるいは労働党の一騎打ちにおける得票率

	自由党	労働党
連立派保守党	36.5	34.5
連立派自由党	37.4	35.4
連立派労働党	48.2	34.3
連立派無所属	35.0	22.5

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は非連立派自由党および労働党の平均得票率 (%) を示す。

選挙区のうち、ヨークシャーのヘムズワース (Yorkshire, Hemsworth) 選挙区が、おそらくは労働党が最も成功した選挙区であった。1918 年総選挙の後、1922 年総選挙では国民自由党 (National Liberal)⁷ との一騎打ち、1923 年総選挙では自由党との一騎打ちで勝利を収め、1924 年総選挙以降は、1929 年総選挙、1931 年総選挙、1931 年の補選、1935 年総選挙、1945 年総選挙はいずれも保守党との一騎打ちとなり、どれも大差で労働党が勝利を収めた。得票率の差は、11.6% (1918) から、26.4% (1922)、40.2% (1923)、38.6%

(1924)、59.8% (1929)、41.0% (1931 補選)、60.2% (1935)、62.8% (1945) まで拡大していった。(この他、1934 年と 1946 年の補選では労働党が無投票当選を果たしている⁸⁾)

ランカシャー (Lancashire) のセント・ヘレン (St. Helen) 選挙区でも、1918 年総選挙の後、1945 年総選挙まで一貫して保守党との一騎打ちが続き、すべて労働党が保守党を打ち負かした。得票率の差は、14.2% (1918) から 17.4% (1922) に拡大した後、一旦 11.0% (1923)、11.6% (1924) に落ち込んだものの、1929 年総選挙では 17.2% にまで再び拡大。1931 年総選挙では全国的な退潮の中保守党に追い上げられ得票率の差は 4.8% にまで縮小したが、1935 年総選挙では 7.4% まで回復、1945 年総選挙には、32.4% と最大値に広がった⁹⁾。

ランカシャーのニュートン (Lancashire Newton) 選挙区も、戦間期には労働党の堅固な地盤となった。1918 年総選挙の後、1922 年総選挙では保守党、無所属との三つ巴戦で労働党は勝利を収め、1923 年総選挙以降 1945 年総選挙まで一貫して保守党との一騎打ちで労働党が常に勝利を収めた。得票率の差は、1922 年には 18.5%、1923 年には 19.8%、1924 年総選挙では 12.2%、1929 年総選挙では 21.0% であった。1931 年総選挙では 1.2% にまで縮小し議席を失う瀬戸際に追い詰められたが、1935 年総選挙では 17.0%、1945 年総選挙では 24.0% に回復して、選挙区の最高得票率を記録した¹⁰⁾。

スタッフォードシャー (Staffordshire) の西ブロミッチ (West Bromwich) 選挙区も、1931 年総選挙を除いて労働党が議席を獲得し続けた。1918 年総選挙の後、1922 年総選挙と 1923 年総選挙は、保守党と自由党との三つ巴戦であったが、労働党が勝利し、1924 年総選挙では保守党との一騎打ち、1929 年総選挙では保守党と自由党との三つ巴戦で労働党が議席を確保した。しかし 1931 年総選挙は保守党と自由党との三つ巴戦になり、全国的な退潮の中で労働党は保守党に 525 票差で惜敗、しかし 1935 年総選挙、1945 年総選挙では再び保守党との一騎打ちで議席を射止めた。1935 年の労働党の得票率は 51.3% であったが、1945 年には 69.9% にまで達し、1941 年の補選で

も、労働党は無投票当選を享受した¹¹。

ただしファイフ西（Fife, Western）選挙区は、1920 年代は労働党の強固な地盤だったが、1930 年以後は、共産党が登場して労働党は苦戦を強いられた。1918 年総選挙の後、1922 年総選挙では労働党が無投票当選、1923 年総選挙でも労働党候補が無所属候補を下し、1924 年総選挙では保守党との一騎打ちを、1929 年総選挙では、保守党、共産党との三つ巴戦を労働党が制した。しかし 1931 年総選挙では労働党は、保守党、共産党との三つ巴戦で保守党に敗れ、1935 年総選挙では、保守党、共産党との三つ巴戦で共産党に敗れ、1945 年総選挙では共産党、国民自由党との三つ巴戦で、共産党に敗北した¹²。

1930 年代に入ると、西ファイフ選挙区のように、新たな政治的な勢力が出現し、共産党に労働党が議席を奪われるという事態も産まれた。だが 1918 年総選挙で連立派保守党との一騎打ちを労働党が制した他の 4 つの選挙区の中では、1945 年総選挙まで一貫して労働党が議席を維持した選挙区が 3、1931 年の総選挙だけ労働党が議席を維持できなかった選挙区が 1 という結果を残した。こうした記録から見る限り、これらの選挙区は、戦間期の労働党の牙城となったと言って良い。

次に 1918 年総選挙で労働党が連立派自由党の候補と一騎打ちで対峙して勝利を収めた 5 つの選挙区をみてみよう。モンマスシャー、ベドウェルティ（Monmouthshire, Bedwellty）選挙区では、労働党は 1945 年総選挙まで一貫して議席を守り抜いた。1922 年総選挙では保守党との一騎打ちを、1923 年総選挙では自由党との一騎打ちを制し、1924 年には無投票当選、1929 年には保守党との一騎打ちに勝ち、1931 年、1935 年総選挙では無投票当選、1945 年には保守党との一騎打ちを制して、この選挙区で労働党は議席を守り続けた¹³。

1929 年総選挙までは、労働党の固い地盤であったが、マクドナルドの「裏切り」を受けた 1931 年総選挙で議席を落とした選挙区が、グロスタシャー、フォレスト・オブ・ディーン（Gloucestershire, Forest of Dean）選挙区、

スタッフォードシャー、リーク（Staffordshire, Leek）選挙区そしてエジンバラ中央（Edinburgh, Central）選挙区の 3 選挙区であり、ノーサンプトンシャー、ウエリングバラ（Northamptonshire, Wellingborough）選挙区も、1922 年総選挙を落としたことを除けば、このパターンに属する。

グロスタシャー、フォレスト・オブ・ディーン選挙区では、1922 年総選挙で労働党は、保守系の無所属候補と国民自由党の候補との三つ巴戦を制し、1923 年、1924 年総選挙では保守党との一騎打ちに勝利し、1925 年の補欠選挙でも 1929 年の選挙でも保守党、自由党との三つ巴戦を労働党が制した。1931 年総選挙こそ、挙国一致内閣を支持する国民労働党（National Labour）に 1500 票余りの票差で議席を奪われたが、1935 年総選挙、1945 年総選挙では労働党が国民労働党を下して議席を奪還した¹⁴。

スタッフォードシャー、リーク選挙区では、1922 年、1923 年、1924 年、1929 年総選挙は何れも保守党との一騎打ちであったが、例外なく労働党が勝利を収め、1931 年総選挙こそ保守党に敗れたものの、1935 年総選挙では国民自由党との一騎打ちを制し、1945 年総選挙でも労働党が議席を守った。対立候補との得票率の差は、3.4%（1918）、1.6%（1922）、7.2%（1923）、3.45%（1924）、17.0%（1929）、-2.8%（1931）、2.8%（1931）で、毎回接戦を繰り広げていたが、1930 年代半ばからは 14.8%（1935）、34.4%（1945）と票差は拡大していった¹⁵。

エジンバラ中央選挙区も、1929 年総選挙までは労働党の固い地盤となった。この選挙区では、1922 年総選挙と 1923 年総選挙では自由党が立候補して自由党との一騎打ちになり、1924 年総選挙では保守党との一騎打ち、1929 年総選挙では自由党、保守党との三つ巴となったが、いずれも労働党が議席を制した。もっとも労働党は 1931 年総選挙、1935 年総選挙と 1941 年の補欠選挙では保守党に一騎打ちで議席を奪われ、1945 年総選挙でようやく議席を奪還した¹⁶。

ノーサンプトンシャー、ウエリングバラ選挙区では、労働党は 1922 年総選挙こそ国民自由党に議席を奪われたものの、1923 年、1924 年、1929 年総

選挙では保守党、自由党との三つ巴戦をいずれも制した。しかし 1931 年総選挙、1935 年総選挙では保守党との一騎打ちに敗れ、1945 年によりやく議席を奪還した¹⁷。

1918 年総選挙で連立派自由党の候補を労働党が破った 5 つの選挙区では、1945 年総選挙まで一貫して労働党が議席を守り抜いた選挙区は一つだけだった。しかし 1931 年総選挙だけを落とした選挙区が 2 つあった。その他の選挙区も 1920 年代についてはおおむね労働党が議席を維持し、労働党の地盤を形成していた。

最後に、表には掲出していないが、実は 1918 年総選挙一人区で自由党の候補と労働党が一騎打ちで対峙した選挙区が 14 あった¹⁸。選挙の結果は、自由党が 9 議席当選した一方、長年目下の同盟者であった労働党が、自由党との直接対決で、5 議席をもぎ取った。しかも注目に値するのは、平均得票率でも、自由党が 52.9% だったのに対し、労働党は 47.1% に達していたことである。ではこのカテゴリーで労働党が勝利した 5 つの選挙区はその後どうなったか。

1918 年総選挙で、自由党の候補と労働党が対決し、労働党が議席を獲得し、その後戦間期を通じて労働党の堅牢な地盤となったのは、ウエールズのグラモーガンシャー、カーフィリー（Glamorganshire, Caerphilly）選挙区と、同じくグラモーガンシャーのガウワー（Glamorganshire, Gower）選挙区の二つであった。

カーフィリー選挙区は、1918 年総選挙の後、1945 年まで、6 つの総選挙と、2 つの補欠選挙で一度の例外もなく、労働党が議席を制した。この間、1922 年は保守党との一騎打ち、1923 年は保守党、自由党との三つ巴、1924 年は保守党との一致打ち、1929 年は自由党、保守党に、共産党を加えた四者の争いになり、1931 年以降は、保守党との一騎打ちが続いた。しかしいずれも労働党が 50% 以上を得票して大勝を収め、1945 年総選挙では労働党は実に 80.2% の得票率を記録している¹⁹。

ガウワー選挙区も同様に、1945 年まで労働党の強固な地盤となった。自

由党は、1922 年の補欠選挙、1922 年、1923 年、1931 年の総選挙に候補を立てて労働党との一騎打ちに臨んだが、いずれも敗退。労働党は、1924 年の総選挙での保守党との一騎打ち、1929 年総選挙での保守党、自由党の三つ巴戦、そして 1935 年、1945 年の挙国一致内閣を支持する国民自由党との一騎打ちも制して、戦間期の間一貫して議席を守り続けた²⁰。

一方 1929 年総選挙まで労働党が議席を維持したものの、第二次マクドナルド政権の瓦解とマクドナルドの「裏切り」による挙国一致内閣の成立を受けた 1931 年総選挙で、議席を落とし、その後 30 年代に党勢を回復した選挙区が、ランカシャーのネルソン・アンド・コーン (Nelson and Colne) 選挙区とノッthingam 西 (Nottingham, West) 選挙区であった。

ネルソン・アンド・コーン選挙区では、労働党は、マクドナルド第二次労働党政権の瓦解を受けた 1931 年総選挙こそ、保守党候補に一敗地にまみれたが、1920 年の補欠選挙では、連立派保守党と自由党との三つ巴を、1922 年、1923 年総選挙は、自由党、保守党との三つ巴を、1924 年総選挙は自由党との一騎打ちを、1929 年総選挙は保守党との一騎打ちを制し、1935 年総選挙では保守系無所属との、1945 年総選挙は保守党との一騎打ちであったが、いずれも労働党がかなりの票差をつけて、議席を獲得した²¹。

ノッthingam 西選挙区も同様なパターンで、1931 年総選挙では全国的な退潮に抗しきれず保守党との一騎打ちに敗れたがものの、1922 年総選挙、1929 年総選挙、1945 年総選挙では保守党と自由党との三つ巴戦を、1923 年、1936 年総選挙では、保守党との一騎打ちを、さらに 1924 年総選挙では、諸派候補との一騎打ちを制して議席を守り続けた²²。

ただしサルフォード北 (Salford, North) 選挙区は、以後必ずしも安定した労働党の地盤とはならなかった。この選挙区は、戦時中の補選で、愛国主義的な無所属の労働者候補ベン・ティレット (Ben Tillet) が議席を獲得した選挙区であるが、ティレットは、1922 年の総選挙では、保守、自由との三つ巴戦を、1923 年の総選挙では保守党との一騎打ちで議席を制したものの、保守党、自由党との三つ巴となった 1924 年の総選挙では、自由党候補が立

候補し票を割り落選、1929 年総選挙では自由党候補がいたにもかかわらず雪辱を果たしたが、ティレットの引退後は、1945 年に復活を果たすまで、1931 年と 1935 年総選挙では保守党に議席を奪われた²³。

このように、1918 年総選挙一人区で一騎打ちで自由党を破った 5 つの選挙区では、労働党は、サルフォード北選挙区を除いて、他のすべての選挙区で、戦間期を通じて強固な労働党の基盤を築いたと考えられる。

3

連立派と非連立派の三つ巴戦での労働党の戦績は、さらに顕著であった。表 3、表 4 は、1918 年総選挙での連立派保守党と非連立派自由党、および労働党が三つ巴戦となった選挙区での戦況を示したものである。まず連立派保守党候補を相手に自由党は、85 選挙区で争いながら 2 議席を獲得したに過ぎなかった。対して労働党は、同じく 85 選挙区で争って 9 議席を獲得した。得票率でも、労働党は、自由党候補より 8% 強上回った。さらに自由党は、連立派自由党の候補に対して 5 選挙区で争ったがすべて敗北。これに対して、労働党は 5 選挙区で争って 1 議席を制した。瞠目すべきは、この場合の得票率で、労働党は実に自由党候補の 2 倍以上、3 倍に迫る票を集めた。こうして三つ巴戦のどのカテゴリーでも、労働党は、自由党をはるかに上回る勢いを示したのである²⁴。

こうした三つ巴戦のうち、連立派保守党の候補と自由党、労働党の三つ巴戦で、労働党が議席を制したのは次の 12 の選挙区であった。これらの選挙区のその後の動向を観察してみよう。

まず連立派保守党、自由党、労働党という組み合わせで戦った 9 つの選挙区の中で、1918 年総選挙以後 1945 年総選挙まで労働党が一貫して議席を占めたのが、モンマスシャー、ポンティプール (Monmouthshire, Pontypool) 選挙区とヨークシャー、ロズウェル (Yorkshire, Rothwell) 選挙区、ヨークシャー、ウェントワース (Yorkshire, Wentworth) 選挙区、スコットランド

表 3 1918 年総選挙一人区における連立派保守党・連立派自由党と自由党・労働党の三つ巴戦の獲得議席²⁵

	自由党	労働党
連立派保守党	2 (85)	9 (85)
連立派自由党	0 (5)	1 (5)
連立派その他	0 (4)	0 (4)

注

1. 出典 F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は非連立派自由党・労働党候補の獲得議席を示す。() 中の数字は、選挙区数を示す。

表 4 1918 年総選挙一人区における連立派保守党・連立派自由党と自由党・労働党の三つ巴戦の得票率

	自由党	労働党
連立派保守党	19.1	27.7
連立派自由党	14.2	39.5
連立派その他	21.1	31.1

注

1. 出典 F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は非連立派自由党・労働党候補の平均得票率を示す。

のグラスゴー、ゴヴァン (Glasgow, Govan) 選挙区、そしてランカシャーのウィガン (Wigan) 選挙区の 5 選挙区であった。

ポンティプール選挙区では、労働党は、1922 年総選挙では保守党、自由党との三つ巴戦を制し、1923 年総選挙では自由党との一騎打ちを、1924 年総選挙では保守党との一騎打ちを、1929 年総選挙では保守党、自由党との三つ巴戦を制した。1931 年総選挙では国民自由党との一騎打ち、1935 年総選挙で保守党との一騎打ち、1945 年総選挙でも保守党との一騎打ちに勝利し、1946 年の補欠選挙でも、保守党との一騎打ちを勝ち抜き、一貫して労働党が議席を占めた。1924 年の保守党候補との得票率の差はわずか 5.2% で

あったが、1945 年総選挙では、46.4% にも拡大した²⁶。

ヨークシャー、ロズウェル選挙区でも、労働党は、1922 年総選挙、1923 年総選挙、1924 年総選挙、1929 年総選挙、1931 年総選挙、1935 年総選挙でいずれも保守党との一騎打ちで勝利を収め、1942 年の補欠選挙は無投票、1945 年総選挙でも保守党との一騎打ちを制した。この間、保守党候補との得票率の差は、37.2% (1923)、30.6% (1924)、52.6% (1929)、24.6% (1931)、44.0% (1935)、50.4% (1945) と 1931 年総選挙で一旦落ち込むものの、1930 年代には大きく回復してゆく起伏を描いて推移している²⁷。

ヨークシャー、ウェントワース (Yorkshire, Wentworth) 選挙区では、1922 年総選挙、1923 年総選挙、1924 年総選挙はいずれも無投票で労働党が議席を獲得、1929 年総選挙では保守党、自由党との三つ巴戦を労働党が制した。1931 年総選挙では国民自由党との一騎打ちで勝利、1933 年の補欠選挙は労働党が無投票で当選し、1935 年総選挙と 1945 年総選挙では、国民自由党との一騎打ちで労働党が議席を守った。対立候補との票差は、圧倒的で、1929 年の総選挙は三つ巴戦であったのに、75.1% を得票、1935 年総選挙では 82.1%、1945 年総選挙では 83.6% を記録している²⁸。

スコットランドのグラスゴー、ゴヴァン (Glasgow, Govan) 選挙区も、1945 年総選挙まで労働党が一貫して議席を守った。1923 年総選挙では、国民自由党との一騎打ちを制し、1923 年総選挙では自由党との一騎打ちを、1929 年総選挙では、選挙区の事情で労働党前議員が無所属で立ったが当選、1931 年総選挙では保守党との一騎打ちに勝利、1935 年には保守党、独立労働党を下し、1945 年の総選挙でも保守党を大きく突き放した²⁹。

ランカシャーのウィガン (Wigan) 選挙区でも、労働党は戦間期一貫して議席を守った。1922 年総選挙、1923 年総選挙、1924 年総選挙では保守党との一騎打ちを制し、1929 年総選挙では保守党、共産党との三つ巴戦を制し、1931 年総選挙、1935 年総選挙では保守党との一騎打ちを制し、1942 年の補欠選挙では無投票、1945 年総選挙でも保守党との一騎打ちを制した。保守党との一騎打ちの場合の得票差は、13.0% (1922)、15.2% (1923)、15.2%

(1924)、2.2% (1931)、22.6% (1935)、36.4% (1945) と、1931 年総選挙では落選の瀬戸際まで追い詰められたが、1930 年代には大きく回復した³⁰。

一方 1931 年総選挙は議席を落としたものの、1945 年総選挙まで他の選挙で労働党が議席を守り抜いたのが、ランカシャーのバーンリイ (Burnley) 選挙区、スタッフォードシャーのウェンズベリー (Wednesbury) 選挙区、スタッフォードシャー、キングスウィンフォード (Staffordshire, Kingswinford) 選挙区、ダラム、ビショップ・ア克蘭ド (Durham, Bishop Auckland) 選挙区の 4 つの選挙区であった。まずバーンリイ選挙区では、1922 年総選挙、1923 年総選挙、1924 年総選挙、1929 年の総選挙は、自由党、保守党との三つ巴戦となったが労働党が勝ち抜き、1931 年総選挙では国民自由党 (挙国一致内閣を支持した自由党員の新党³¹) と共産党との三つ巴戦で、労働党は国民自由党に負けて議席を失ったが、1935 年総選挙、1945 年総選挙では国民自由党との一騎打ちで、労働党は議席を守り抜いた³²。

ウェンズベリー選挙区では、労働党は 1922 年総選挙、1923 年総選挙、1924 年総選挙で保守党との一騎打ちを制し、1929 年総選挙では保守党、自由党、無所属候補との四者対を勝ち抜き、1931 年総選挙では保守党に敗れるものの、1932 年の補欠選挙では保守党との一騎打ちを、1935 年総選挙では国民自由党との一騎打ちを、そして 1945 年総選挙でも同じく国民自由党との一騎打ちを制して議席を守った³³。

ダラム、ビショップ・ア克蘭ド選挙区は、1918 年総選挙は、連立派自由党と自由党、労働党という珍しい組み合わせで闘われ、労働党が議席を獲得したが、この選挙区でも、1931 年総選挙を除いて、1945 年まで労働党が議席を制した。1922 年総選挙は国民自由党との一騎打ち、1923 年総選挙は自由党、保守党との三つ巴戦、1924 年総選挙は自由党との一騎打ちとなり、1929 年 2 月の補欠選挙では自由党、保守党との三つ巴戦、1929 年総選挙では自由党、保守党との三つ巴戦であったが、何れも労働党が勝ち抜いた。しかし 1931 年総選挙では労働党は、国民自由党の候補にわずか 955 票差で惜敗した。しかし 1935 年には自由党を一騎打ちで破り (得票差 8086 票、得票

率の差 24.6%)、1945 年総選挙でも国民自由党を一騎打ちで破った（得票差 8860 票、得票率の差 28.2%）³⁴。

スタフォードシャー、キングスウィンフォード選挙区では、1918 年総選挙は保守党、自由党、労働党という組み合わせで闘われ、労働党が議席を射止めたが、1922 年総選挙では労働党は国民自由党との一騎打ちを制し、1923 年総選挙では保守党、自由党との三つ巴戦にも勝ち、1924 年総選挙には保守党との一騎打ちに勝利し、1929 年総選挙では保守党、自由党との三つ巴戦を勝ち抜いた。1931 年総選挙では保守党との一騎打ちで敗北して議席を明け渡したが、1935 年総選挙では保守党との一騎打ちを、わずか 16 票差で競り勝って議席を取り戻し、1945 年総選挙では保守党を一騎打ちで、大差で下し議席を守った³⁵。

もっとも残った他の 3 つの選挙区の労働党のパフォーマンスは、必ずしも盤石ではなかった。まずストック・オン・トレント、バースレム（Stoke-on-Trent, Burslem）選挙区では、労働党は 1922 年総選挙で国民自由党との一騎打ちで、わずか 205 票差で競り勝ったが、1923 年総選挙では、同じく自由党との一騎打ちに 63 票差で敗れた。1924 年総選挙には諸派³⁶に一騎打ちで勝ち、1929 年総選挙には保守党、自由党との三つ巴戦を制したものの、1931 年総選挙には国民自由党と諸派³⁷の候補者との三つ巴戦で国民自由党に敗れ、1935 年総選挙では国民自由との一騎打ちで議席を回復し、1945 年総選挙では国民自由党と労働者の無所属候補との三つ巴戦に勝って議席を得た³⁸。

リンカーンシャーのホランド・ウィズ・ボストン（Lincolnshire, Holland with Boston）選挙区では、1922 年総選挙では保守党、自由党との三つ巴戦を労働党が制し、1923 年の総選挙では保守党との一騎打ちに労働党が競り勝った。しかし 1924 年の補欠選挙と 1924 年の総選挙では、保守党、自由党との三つ巴戦で保守党に敗れ、1929 年の補欠選挙ではこれにさらに諸派³⁹が加わった 4 者対決で自由党に敗れ、1929 年総選挙でも保守党、自由党との三つ巴戦で自由党に敗北、1931 年総選挙、1935 年総選挙、1937 年の補欠

選挙、そして 1945 年の総選挙でもいずれも一騎打ちで国民自由党に敗れた⁴⁰。

ランカシャー、クリズロー（Lancashire, Clitheroe）選挙区は、1918 年総選挙で保守党、連立派自由党、労働党という珍しい組み合わせで闘われ、労働党が議席を獲得したが、この選挙区では労働党の前進は、一時的なものにとどまった。労働党は、1922 年総選挙では保守党との一騎打ちに敗れ、1923 年の総選挙では保守党、自由党との三つ巴戦で保守党に敗れ、1924 年総選挙でも保守党との一騎打ちに敗れた。1929 年総選挙でも保守党、自由党の三つ巴戦で善戦したがわずか 443 票（1.2%）の僅差で届かずに保守党に敗北、1931 年総選挙では、保守党に 9441 票（24.0%）と大きく水をあけられた。1935 年総選挙の保守党との一騎打ちも及ばなかったが、1945 年総選挙でようやく議席を回復した⁴¹。

1918 年総選挙で労働党が三つ巴戦を勝ち抜いた 12 の選挙区のうち、1945 年総選挙まで労働党が議席を確保したのが 5 選挙区、1931 年総選挙だけを落とした選挙区が 4 選挙区あった。三つ巴戦の性格上、対抗馬の数が変わると選挙結果は大きく変わるため、連勝が続く確率が低いのは当然である。この点を考慮に入れると、この三つ巴戦のカテゴリーでも、1918 年総選挙での労働党の戦果は、戦間期の労働党の伸長にとって、重要な橋頭堡の役割を果たしたことは否定できないであろう。

4

1918 年総選挙は、結果として、連立派与党の圧勝に終わった。1910 年総選挙における 42 議席から 57 議席への労働党の前進は、議席の上では、控えめな勝利であった。しかも自由党の分裂が、この労働党の伸長の直接の契機であった以上、労働党の勢いは、一時的なものに終わる可能性も捨てきれなかった。ここに、1918 年総選挙は、労働党の「躍進」ではない、という見解が生まれる根拠がある。

しかし本稿で見たように、つぶさに見ると、労働党が自由党にとってかわるという二人区でみられたようなプロセスは、一人区についても、すでに姿を表わしていた。労働党が 1918 年総選挙で一人区を制した選挙区は、1920 年代はもちろん、戦間期全体を通じて、幾つかは堅固な地盤となり、多くはその後の前進の橋頭堡となった。選挙区全体の中では、確かにそれは一部に過ぎなかった。とはいえ、それは自由党の目下の同盟者であった労働党が、自由党との選挙協力なしに、時には自由党と正面から争って、労働党が勝ち取った陣地であり、その後の労働党の伸長の確かな足がかりになったことは否定できない。この前進が、果たしてピューの言うように、「労働者階級の愛国主義へのアピール」によるものであるかどうか⁴²。サルフォード北選挙区のような例を念頭に置くと、それはなお研究の課題と言わねばならない。しかし少なくとも、1918 年総選挙で、労働党は「既存の領域」(ピュー)を超え、新しい地平を展望する戦績を残した。それを疑う余地は乏しいであろう。

注

- 1 アイルランド自治問題をきっかけに自由党を脱党した自由統一党 (Liberal Unionists) は、やがて保守党と合流し、19 世紀末から 1920 年代まで一般に統一党 (Unionists) と呼ばれるようになる。本稿は、1918 年総選挙以降をもっぱら扱うため、混乱を避けるため第一次大戦後については、保守党 (Conservative) の呼称を用いる。
- 2 本稿では、煩雑な表現を避けるために、ロイド・ジョージからの信任状—いわゆる「クーボン」(coupon)—を受け取って連立政権に与した自由党候補を、連立派自由党の候補と呼び、それに与せず、アスキスに従った自由党を単に自由党と呼称する。なお、同じく「クーボン」を受け取って連立政権に与した少数の労働党候補を連立派労働党候補と呼び、それ以外を労働党の候補と呼称する。
- 3 この表現は、言うまでもなくケンブリッジのピーター・クラーク (Peter Clarke) の先駆的研究によるものである。例えば Peter Clarke, *Lancashire and the New Liberalism* (Cambridge, 1971), 'Electoral Sociology of Modern Britain', *History*, 17 (1972).
- 4 拙稿「自由党の分裂と労働党—1918 年総選挙二人区の戦況—」(『英米研究』大

- 阪大学英米学会、40 号、2017 年所収）参照。
- 5 本稿は、19 世紀末から 20 世紀初頭に至るイギリスの自由党の衰退と再生、労働党の勃興の選挙政治を対象とした筆者の一連の研究の一環をなすものである。これまでの分析の試みについては以下の論考を参照されたい。「近代イギリス選挙史研究序説－第三次選挙法改正後のイギリスの政治変動」（『イギリス研究の動向と課題』、大阪外国語大学、1997 年所収）、「アイルランド自治問題とイギリス政治の転換－1886 年総選挙における自由党の分裂」（『グローバルヒストリーの構築と歴史記述の射程』、大阪外国語大学、1998 年所収）、「19 世紀末における自由党の衰退」（『国際社会への多元的アプローチ』、大阪外国語大学、2001 年所収）、「自由党の衰退と反攻－19 世紀末イギリス総選挙と補欠選挙－」（『英米研究』、大阪外国語大学英米学会、2004 年所収）、「1906 年総選挙と自由党の再生－20 世紀初頭の補欠選挙と 1906 年総選挙における対決の構図－」（『英米研究』第 30 号、大阪外国語大学英米学会、2006 年所収）、「1906 年総選挙における自由党の再生と労働党－二人区の得票分析－」（『英米研究』第 31 号、大阪外国語大学英米学会、2007 年所収）、「1906 年総選挙における自由党の選挙基盤－一人区の得票分析」（『英米研究』第 32 号、大阪大学英米学会、2008 年所収）、「自由党政権下の補欠選挙－続ける自由党の基盤 1906 年～1909 年－」（『英米研究』第 33 号、大阪大学英米学会、2009 年所収）、「20 世紀初頭自由党政権下の社会政策と選挙政治－1906 年～1910 年 1 月－」（杉田編『日米の社会保障とその背景』、大学教育出版、2010 年所収）、「危機の時代の自由党－補欠選挙 1911 年～1914 年」（『英米研究』第 35 号、大阪大学英米学会、2011 年所収）、「憲政危機と勝利の陥穽－1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙－」（『英米研究』第 36 号、大阪大学英米学会、2012 年所収）、「投票率と 1910 年総選挙」（『英米研究』第 37 号、大阪大学英米学会、2013 年所収）、「第一次大戦下の補欠選挙 1915～1918－総力戦の衝撃－」（『英米研究』第 38 号、大阪大学英米学会、2014 年所収）、「第一次大戦下のサルフォード北補欠選挙と自由党の衰退」（『英米研究』第 39 号、大阪大学英米学会、2015 年所収）、「1918 年総選挙と自由党・労働党－一人区における政党の対決の構図」（『英米研究』大阪大学英米学会、40 号、2016 年所収）「自由党の分裂と労働党－1918 年総選挙二人区の戦況－」（『英米研究』大阪大学英米学会、41 号、2017 年所収）。
- 6 拙稿「1918 年総選挙と自由党・労働党－一人区における政党の対決の構図」前掲、参照。
- 7 国民自由党は、1923 年に連立派の自由党が立ち上げた政党である。
- 8 F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamen-

- tary Research Services, Chichester, 1983), p.517.
- 9 *Ibid.*, p.230.
- 10 *Ibid.*, p.403.
- 11 *Ibid.*, p.271.
- 12 *Ibid.*, p.624.
- 13 *Ibid.*, p.565.
- 14 *Ibid.*, p.360.
- 15 *Ibid.*, p.463.
- 16 *Ibid.*, p.580.
- 17 *Ibid.*, p.439.
- 18 1918 年総選挙の一人区で労働党候補が勝利を収めた選挙区は 20 あったが、あとの 5 つは諸派との争いであったため、ここでの分析の対象からは省く。
- 19 F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949*, op.cit., p.557.
- 20 *Ibid.*, p.558.
- 21 *Ibid.*, p.199.
- 22 *Ibid.*, p.201. 諸派は憲法党 (Constitutionalist)。
- 23 *Ibid.*, p.231.
- 24 なお、ロイド・ジョージからのクーポンを受け取っていないので連立派には含まれていない保守党候補を相手に、自由党は 8 選挙区で争い 1 議席を獲得 (平均得票率 22.6%)、労働党も 8 選挙区で 1 議席を獲得した (平均得票率 29.3%)。このカテゴリーでも労働党の得票率が自由党をうわまわっている。また保守党・連立派自由党に自由党が挑んだ三つ巴戦があったが自由党は 1 選挙区で争ったが敗 (25.4%)、労働党は 10 選挙区でこれに挑み、1 議席を獲得している (平均 27.9%)。
- 25 掲出の組み合わせ以外に、諸派がからむ三つ巴戦が 7 選挙区あり、いずれも労働党が勝利している。ただし自由党と労働党との関係に焦点を集めている本稿の目的からは外れるため、ここで省いている。
- 26 F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949*, op.cit., p.568.
- 27 *Ibid.*, p.523.
- 28 *Ibid.*, p.529.
- 29 *Ibid.*, p.590.
- 30 *Ibid.*, p.276.
- 31 前出のロイド・ジョージの連立派自由党の後継とは異なる政党である。
- 32 F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949*, op.cit., p.111.

- 33 *Ibid.*, p.268.
- 34 *Ibid.*, p.339.
- 35 *Ibid.*, p.445.
- 36 Constitutionalists.
- 37 Commonwealth Land Party.
- 38 F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949*, *op.cit.*, p.251.
- 39 Agricultural Party.
- 40 F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949*, *op.cit.*, p.414.
- 41 *Ibid.*, p.393.
- 42 Martin Pugh, *Speak for Britain! A New History of the Labour Party* (Vintage, 2011), p.125.